

朝日 歌壇 俳壇



〈ウメⅢ〉 日高理恵子

佐佐木幸綱選

寒中の阪神淡路震災今年も熱いお茶を供える
 (兵庫県) 福本 都
 それぞれの水脈を残して今日集ふ我等果立ちぬ同じ練習船より
 (横浜市) 白川 修
 風暮る夕べは遠く富士山の雪巻き上げて下る
 (多摩市) 豊間根則道
 京都より五百番目の川という五百川なりわが町流る
 (郡山市) 遠藤 雅子
 赤い夷をびっしりつけたヒラカンサ亡母は「ヒラカンさん」と呼んでいた
 (高松市) 高崎 英子
 ☆さりげなく職員室と事務室に刺股がありときどき光る
 (西条市) 村上 敏之
 寒ぶりに寒たら寒がき寒さばをチラシに見つ一人寒さけ
 (上越市) 藤田 健男
 後ろ蹴りムエタイよりも痛いのには牛と云っていた獣医師の亡父
 (姫路市) 筋吹 征一
 ☆吾が歌の載りし新聞早朝の空港に買いてパリに限りぬ
 (フランス) 佐久間尚子
 四月から小田原に住むこと決まり「おさるのかじや」唄って過ごす
 (吹田市) 中村 玲子

【評】第一首、阪神淡路大震災をうたう地元の作者の一首。「今年は……」が重くひびく。第二首、かつて練習船仲間だった人たちが集まった今日。参加者の期待と喜びが読める。第三首、風が見える、そんな冬の富士山ならではの光景。

高野公彦選

若き日は歴史嫌いの私の眼を開いてくれた人、菜の花忌
 (茂原市) 山口 明雄
 栗味のアイスもそれをうまそうに食む子を見るのも期間限定
 (和泉市) 星田 美紀
 欠けている月の輪郭たどるように吾子の話を聞く冬の夜
 (奈良市) 山添 聖子
 コロナ過ぎ親しき友とこる屋敷面変わりせるを互ひに言はず
 (札幌市) 木下 澄子
 コロナ明けインバウンド呼ぶ村興しの里の夜神楽せりふは英語 (安芸高田市) 安芸 深志
 能登地震潰れた家の傍らに椿咲くのが一入悲し
 (さいたま市) 森田 光子
 時という包帯がある PKを外し芝生に泣き伏す少年
 (観音寺市) 篠原 俊則
 クメール朝の石の神殿に印された方位はスマホの磁石とびつたり
 (東京都) 上田 結香
 ☆吾が歌の載りし新聞早朝の空港に買いてパリに限りぬ
 (フランス) 佐久間尚子
 長田区の叔父叔母達はもうおらん震災二十九年目の空
 (神戸市) 松本 淳一

【評】一首目の「菜の花忌」は、魅力ある歴史小説や歴史エッセイを数多く書いた司馬遼太郎が亡くなった2月12日。二首目と三首目は、わが子と自分の関わりを静かに見つめる優しい母親の歌。四首目と五首目、コロナ後の感慨を詠む。

永田和宏選

雪の降る能登の画面に慣らされてゆく私等ではないはずはない
 (取手市) 近藤美恵子
 夕食費すし削って千円を募金しました妻の報告
 (相模原市) 金澤 紀六
 いまが一番私らしい今の私であつた君に会いた
 (大牟田市) 志岐 鈴恵
 「歳とればわかる」が口くせだった母わかつたわれを見てはしかなかった(和泉市) 星田 美紀
 くじびきで得たる一日エキストラわかしはありき学生相談所
 (大和郡山市) 四方 護
 ストープで弁当温めてくれし用務員さんとう昭和があった
 (寝屋川市) 今西 富幸
 ☆さりげなく職員室と事務室に刺股がありときどき光る
 (西条市) 村上 敏之
 「頑張り」と入試の朝の教を子に言ってしまったあの時の悔い
 (観音寺市) 篠原 俊則
 京都にもそうかなのかタテカン早稲田も同じ枯葉踏みゆく
 (市川市) 渡部 幸子
 しばりつは見なくて済んだトランプを恐ろしく毎日見る羽目になる(五所川原市) 戸沢大二郎

【評】近藤さん、画面の向こうには決して慣れることのない厳しい生活が続いているのだと、改めて自戒する。そんな思いを夕食費を削った募金でと、金澤さん。十首目、まことに同感だが、どちらが大統領になっても危ういぞ、アメリカ。

馬場あき子選

久々の水の勢ひ断水の解消したる便座のぬくし
 (羽咋市) 北野みや子
 「千年に一度こうして陸となる」と学者紅潮す港の隆起に
 (福島市) 青木 崇郎
 病院の古いしんららの中にいて赤子の泣き声肺腑にしみる
 (東京都) 坂 宣夫
 この珠洲に原発すすめいし国に伏して詫びよと能登びと言わず
 (水戸市) 中原千絵子
 古老云う「雪の深さは情の深き助け合ねば生きられない」と
 (長岡市) 柳村 光寛
 絶海の孤島にくらす赤ちゃんのソウアザラシも指しやぶりする
 (堺市) 丸野 幸子
 地震のあと悲鳴のような鳴き声に牛らを見遣る酪農の人
 (一宮市) 園部 洋子
 母とカフェで姉の恋路を話し合う一話をつぐらいにして
 (富山市) 松田 わこ
 園原の伏屋帯木霧深し伝説に酔ふ吾れ一人旅
 (埼玉県) とやてるき
 竹の枝を上州の風除けとして豌豆青つ大寒の
 (前橋市) 荻原 葉月

【評】第一首は能登半島西側の羽咋市から。断水解消の歌にほっとするが、全域回復の日まで心配は絶えない。第二首の地震学の方面からの発言も耳にとまる。第九首の園原の帯木は歌枕。遠くからは見えて近づくと存在しない嘘え。

短歌時評 結社の戦略

小島 なお

昨年末に刊行された角川の令和6年版「短歌年鑑」で、特別座談会「結社はどこへ向かうか」が組まれている。メンバーは外塚喬(朔日)、佐伯裕子(未老)、米川千壽子(かりん)、楠響英(ヤママユ)、筆者(コスモス)。

みな結社に所属しており、結社との出会いや、内部の体制、高齢化やコロナ禍における課題や対策、懐事情まで、他結社間では普段あまり共有されない内部の情報を持ち明けて、話し合った。結社にまつわる座談会はこれまでも度々企画されてきたが、それだけ外からは見えにくい組織であることの証左だろう。

結社に入るか、入らないか。かつては短歌を続けるのであれば活動拠点として、指導を受ける場として、結社に所属するのが自然な流れであった。けれど、今は同人誌やインターネットなど活動発表とにも多様な場が広がったことで、結社は選択肢のひとつになった。無所属で活動する人もいれば、複数の結社や同人誌に所属し、自らのニーズに合わせて活動する人も増えた印象を持っている。多様化する歌人たちのニーズに合わせて結社も少しずつ戦略的に変革している。作者と主体を同一視する結社的な読みや世代間で差のあるジェンダー観などを、結社の顔である編集人や選者の層から変えていこうとする動きもみられる。

先日、二十代の歌人と話したときに、「同世代が少ない結社のほうが多くの先輩に自分の個性を見つけてもらえそうなのが気か」と決め手を教えてくれた、なるほどと思った。結社を選ぶ側もまた戦略的であっていい。

(歌人)

◇朝日俳壇 入選取り消し 2023年12月10日付の俳壇に掲載した「天界に待つ人増えて冬銀河」と、24年1月28日に掲載した「寒の水棒の如くに飲み干せり」は共に類似の先行句がありましたので、入選を取り消します。また、2月11日に掲載した「湯の中のわが手が足春を待つ」は同一の先行句がありましたので、入選を取り消します。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があります。